

が爲であらうと考へる<sup>③</sup>。その證據の一つとして注意すべきは、碑文中に貞觀十二年七月、太宗が景教を天下に行はしむべきを宣した詔を載せ、

道無常名、聖無常體、隨方設教、密濟群生、大秦國大德阿羅本、遠將經像、來獻上京、詳其教旨、玄妙無爲、觀其元宗、生成立要、辭無繁說、理有忘筌、濟物利人、宜行天下。

と見えて居ることである。この詔はかつてノイマン (Neumann) がその偽作なるべきことを強く論じたものであるが、然もこの全文は唐會要卷四十九、大にも載せられて居り、碑文の「大秦國大德」が、會要には當然の理として單に「波斯僧」とあり、また「觀其元宗」及び「辭無繁說、理有忘筌」の三句が、會要所載の文には見えないだけの相違であつて、もとより眞實の詔であることは疑ふべき餘地は無い。さてこゝに太宗の詔に於て詳にされて居る景教の教旨なるものが、如何に道德經説く所の要旨に似て居ることの著しいかは、何人も直ちに認める所であつて、若し此の一文に、「大秦國大德阿羅本、遠將經像、來獻上京」の十六字だけが無かつたならば、これを以て老莊の教を天下に行はんが爲に下した詔であるといふても認め得られる所である。特に此の詔の中に、「詳其教旨、玄妙無爲」と見えて居るのは、教旨を聞いた方でこれを要約してかく言ひ表はしたのか、或は説いた方で特にかくいふたものか判定し難いとしても、何れにしても景教の教義の要約として説きもせられ、認められもしたものに相違なく、その教義に關する甚大なる意義を有する語と見なければならぬ。然るに此の語はいふまでもなく道德經の首章の「玄之又玄、衆妙之門」、また「聖人處無爲之事、行不言之教」を始め、頻りに道德經中に説かれる「無爲」なる語を取り出したものであつて、これによつても如何に景教がその教義を説くに當つて老子に類縁を求めたもの